批評と紹介

Th. フィリップ＆U. ハールマン編

エジプトの政治・社会の中のマムルークたち

鈴木　陵二

イスラーム世界の歴史において、支配者が奴隷出身者、ないし奴隷的性格を持つ集団であった場合は少なくない。但し、その性格は地域、時代によって多様性に富んでおり、近代的な「奴隷」観で包括し得るものでないことは改めて指摘するまでもない。そのため、明確なエリート像を構築する際には、個々の研究の深化と併せ、各分野の研究者間での更なる意見交換が必要となる。去る1998年10月に我が国で行われたシンポジウム「中東・アフリカにおける奴隷エリートの比較研究」が多地域間の奴隷エリート現象を比較検討する試みであったのに対し、本書はエジプトという特定のフィールドに約5世紀半に亙って蓄積されたマムルークの足跡を対象にした研究である。

本書は1994年にフランクフルト近郊の Bad Homburg で行われたシンポジウムの発表原稿が基となっており、*Cambridge Studies in Islamic Civilization* シリーズとして出版されている。シンポジウムの企画及び本書の編集に携わった2人は既に数々の業績で知られているが、改めて簡単に紹介したい。エアランゲン政治学研究所教授のTh.フィリップ（Thomas Philipp）は *The Syrians in Egypt, 1725-1975*（1985, Stuttgart）をはじめとするオスマン朝～近代のシリア系移民に関する研究やジャバルティー『エジプト史』の編集に携わっている。1999年6月に逝去された U.ハールマン（Ulrich Haarmann、本書刊行の時点ではキール大学教授）はマムルーク朝における年代記記述の変遷を論じた文献学的著作 *Quellenstudien zur frühen Mamlukenzeit*（1969, Freiburg）やマムルークの息子に関する多数の研究論文があり、Brill 社のシリーズ *Islamic History and Civilization, Studies and Texts* の編者も務めるなど、ドイツの中東史研究の指導的存在であった。

序文において編者は、オリエンタリストがマムルークをイスラーム世界衰退の一過程としてのみ認識してきたこと、また近代エジプトの歴史家はエジプトをその政治・文化的頂点に導きながら遂にエジプト国民と同化することのなかったマムルークというエリートに対しアンビヴァレントな感情を持っ

て扱ってきたことを指摘する。そして D. Ayalon 以来40年足らずの歴史しか持たないマムルークに関する実証研究の歴史を踏まえ、研究者間の意見交換とマムルーク研究の到達水準（'state of the art'）についての印象形成をシンポジウムの目的としている。18の発表テーマは、①マムルーク・エリート層の構成員がその階級・体制内部で行った、政治的及び社会的影響力を巡る抗争　②軍事的支配層であるマムルークと非マムルーク階層との関係に大別される。編者はこれらの発表をトピック別に4部に分割した。以下が本書の構成である。

第1部　マムルークの支配と継承
- 1章　献呈文学－宮廷文学の1ジャンル（P. M. Holt）
- 2章　マムルーク兵士対アミール－マムルーク軍事機構における新規範（A. Levanoni）
- 3章　マムルーク・アミールとその家族、家産体制（D. S. Richards）
- 4章　ヨセフの法則－オスマン朝のエジプト征服以前におけるマムルークの息子の経歴と役割（U. Haarmann）

第2部　マムルークの家産体制－統一性と分裂
- 5章　オスマン征服に続くマムルークの再登場（M. Winter）
- 6章　オスマン朝における「マムルーク家産体制」と「マムルークの党派」－再検討（J. Hathaway）
- 7章　18世紀におけるマムルークの個人的忠誠と政治権力（Th.Philipp）
- 8章　1811年のムハンマド・アリー・パシャによる粛清以前におけるマムルークのベイ支配体制（D. Crecelius）

第3部　マムルークの文化、科学、及び教育
- 9章　マムルーク朝天文学と計時官（*Muwaqqit*）組織（D. A. King）
- 10章　ムスリムとしてのマムルーク－軍事エリートと中世エジプトにおけるイスラームの構築（J. P. Berkey）
- 11章　ペルシア弓の遅れた勝利－マムルークによる武具独占に対する批判的見解（U. Haarmann）
- 12章　アラブ歴史書に反映されたオスマン期エジプト・シリア（1517－1700）の歴史観（O. Weintritt）
- 13章　マムルーク家産体制のもとでの文化生活（後期オスマン時代）（N. Hanna）

第4部　マムルークの財産、地誌と都市社会
- 14章　マムルーク朝とオスマン朝時代（14～18世紀）におけるカイロのエリート居住域（A. Raymond）

15章　カイロにおける都市パトロネージの諸類型－マムルーク朝期、オスマン朝期を比較して（D. Behrens-Abouseif）
16章　初期の*naẓar al-khāṣṣ*に関するノート（D. P. Little）
17章　ナイルのコプト教祭礼－古来の逸脱か？（H. Lufti）
18章　18世紀後期エジプトにおける婚礼（A. Lufti al-Sayyid Marsot）

第14章は Raymond による仏語原稿を Stefan Winter が英訳したものである。各執筆者の紹介については紙数の都合上割愛するが、評価を確立した大家から今後の活躍が期待される新鋭までヴァラエティーに富んでいる。以下、各章の内容について紹介したい。

第１部（第１～４章）はマムルーク朝の体制内部を対象としている。第１章は、支配者に捧げられた伝記７点（内５点がマムルーク朝スルタンに、オスマン朝のセリム１世と17世紀の有力者リドワーン・ベイに１点ずつ）の内容を紹介する。支配の正統性を証明するための（伝記作者から見た）簒奪者の記述の抹消や、数字に因んだこじつけ（スルタン、ムアイヤド・シャイフはスルタンの息子出身者を除けばマムルーク朝第９代のスルタンにあたるが、イスラーム世界には９の偉大な王朝があり、それぞれの王朝は９人の偉大な支配者を輩出すると伝記作者のアイニーは記している）など個々の記述は興味深いが、詳しい分析はなされておらず、史料の列挙に終わった感がある。類書が多い中、この７点を選択した理由も明確ではない。第２章は15世紀に顕著な現象となるマムルーク兵士の暴動、不服従、離反などをチェルケス人の民族的特性とする D. Ayalon 説を再検討し、マムルークの購入→長期間にわたる教練という厳格なシステムにより培われた主従関係がナースィル・ムハンマドの治世第3期に解体し、イクターを短期間で保有可能になったことでマムルーク兵士の経済力が向上し、アミールは権力闘争において彼らの支持を必要としたと論じる。マムルーク兵士が軍事権力のみならず法廷も左右していくという指摘も社会構造の変化という観点から注目に値する。第３・４章はマムルークの世襲という共通したテーマを扱っている。第３章はマムルーク主従間の擬似家族関係・姻戚関係による財産の継承を指摘した上で、史料上に記載されたマムルークの息子（*awlād al-nās*）出身アミール197人のリストを紹介する。第４章はより具体的に、ナースィル体制化における *awlād al-nās* の定着から始まる歴史的展開を検討した上で、軍事体制の一員として、ワクフ財産などを通して経済活動を営むものとして、そしてイスラーム文化の担い手としての側面を考察し、*awlād al-nās* が第一世代のマムルークと土着文民という対立する２つのエリート層の橋渡し役を担っていたと結論づける。Haarmann の専門であるこの階層の研究が売買文書の利

用を通して深化を見せている。

第2部（5～8章）はオスマン朝におけるマムルーク体制のあり方を探っている。第5章では、16世紀初頭～17世紀におけるオスマン朝の対マムルーク政策の変化（抑圧→融和）を時系列的に確認した上で、エジプトの政治的安定を保つためにマムルークが存続したものの、内実的には文民によるマムルーク保有など変化が生じていたとの見解を述べる。第6章はマムルーク朝－オスマン朝間の土地制度における非連続性を指摘し、家産体制（household）のみを共有するとしている。そして17世紀中期～18世紀中期の間エジプトを二分したFaqārīとQāsimīという党派の旗印の象徴性を指摘し、後者は「マムルーク」という政治文化を土着支配層であることの主張として選択的に使用していたと結論づける。第7章はジャバルティー『エジプト史』を中心にマムルーク体制の変化を論じる。党派内部の主従関係は当初非常に強固であったが、18世紀半ばにアミールRiḍwān Kathudā al-Jalfīが配下のマムルークに暗殺された事件を境にこの紐帯が崩壊し、近衆集団による主君の暗殺が横行し、オスマン海軍のḤasan Ḳapūdān Pashaによる征服（1786年）は実質的にエジプトのマムルーク体制の終了であったと結論付けている。第8章は1760年代の‘Alī Bey al-Kabīr統治期からムハンマド・アリーによる粛清までのマムルークの実態を主にフランスなど西洋の記録から検討し、内紛や疫病により‘Alī Bey al-Kabīr以前の4分の1程度に減少したチェルケス・グルジア系マムルークの補充としてユダヤ教徒、黒人、アルメニア人、ロシア人、クロアチア人、イタリア人、フランス人、イギリス人など多彩な民族構成のマムルークが重用されていたとする。ロシア系は露土戦争、東欧系はハプスブルク家対ロマノフ朝の抗争により流入するなど、当時のヨーロッパ政治情勢とエジプトの密接な関係を表す事実として興味深い。

第3部（第9～13章）ではマムルークと文化の関係が扱われている。第9章はマムルーク朝下で天文観測記録（*Zīj*）を著し、あるいはモスクの計時官（*Muwaqqit*）を勤めた人物19人を紹介した後、計時官の性格について検討する。但し、計時官がどのような役割を担っていたか示す史料がなく、ワクフ文書にも本来いる筈の計時官に対する給与支給の記述がない場合があるなど、King自身が述べているように、この研究分野は未だ発展途上にあるようである。第10章はマムルーク－ウラマーという2分法による文化解釈の限界を指摘し、マムルーク自身の文化に対する態度はより複雑で錯綜したものであったと主張する。その上でスルタン・ガウリー時代の知的サロンの模様を記した刊行史料2点の内容から、マムルークがイスラームという宗教を構築する積極的な参加者であるという歴史像を導き出している。知的サロンの主催者がスルタン自身であり、どの程度実際の雰囲気を反映していたのか

は Berkey 自身認めている通り検討の余地がある。しかしスルタン個人がコーラン解釈をめぐる討論に参加する模様が詳細に記された史料に着目するのはインフォーマルな知の伝達過程を論じた Berkey らしい切り口といえる。第11章はマムルーク朝期に多数著された『フルースィーヤ（騎士道）の書』の中からハンバル派法学者 Ibn al-Qayyim al-Jawziyya におけるペルシア弓の問題（預言者のハディースにはペルシア弓を用いる者は呪われるという文言があるのに対し、著者は当時と現在の歴史的状況の違いによりペルシア弓を合法であると判断する）を紹介し、法学者はマムルークによるペルシア弓をはじめとする新武術の導入とその独占（即ち*bid'a*）に批判的見解を持ちつつ、イスラーム世界を守護する唯一の武力である彼らの存在を許容せざるを得ないというジレンマに陥っていたとする。第12章は17世紀の歴史家 al-Bakrī の著作を検討し、オスマン朝の年代記は地方史と帝国史双方の側面、またマムルーク朝と自らの時代の連続性を視野に収めていたとする。第13章はジャバルティーの記述と相続法廷（*Qisma'Askariyya*）文書を用いて18世紀の個人蔵書を検討し、当時の知的関心は決して宗教的知識に偏らず歴史、天文学、医学など広範な分野に亙っており、その担い手もマムルークを中心に多様であったと結論づける。Hanna が展開している議論は Berkey とも共通した方向性を持っており、従来の研究には知的状況を形式面と有力な著作や人物に偏って考察する傾向があるとの批判にも説得力がある。

第４部（第14～18章）には都市社会史の研究が集められている。第14章はカイロをファーティマ朝以来の市街地、南部（城砦下）、カイロ運河西岸に３分し、年代記、地誌、法廷文書を駆使してエリート層の居住地の変遷を探る。13世紀末から18世紀に至るまでは南部郊外での建造が増えて行く傾向に変化はないが、18世紀末には西岸地区での建造が急増しているとしており、時代毎に詳しい位置も図示されている。但し、西岸地区については、エリートによる住居建設やモスクが少ないことを理由に「この広大な地域は、現代の歴史家たちがあまりにも無批判に受容してきたマクリーズィーの活気に満ちた記述にもかかわらず、より後代になるまで都会化しなかったと思われる」(p.217) と結論づける Raymond 説はやや性急に過ぎると思われる。マムルーク朝の史料で判断する限り、軍人エリートによる建築の傾向は城砦付近に居を構えたほうが政治的・軍事的に優位である点に関係し、またモスクについては宗教的中心地としてのカイロ旧市街やカラーファ地区の重要性を認識すべきであると評者は考えている。第15章は主に年代記から建築におけるワクフを利用したパトロネージの類型の問題を扱っているが、マムルーク朝期とオスマン朝期ではその性格が異なるとの比較を行っている。前者の宗教的建造物とそれに伴うワクフ建造物はカイロを首都とし、その繁栄を保持す

るという明確な目的のもとに計画的に営まれたのに対し、後者においては支配層の個人的意図に基いて建築がなされ、ワクフの設定もマムルーク朝時代の施設を流用したものが多く、また特定の目的に基いたものではないとする。第16章はナースィル・ムハンマド時代に *naẓar al-khāṣṣ*（スルタンの私的財産の管理官）を勤めた人物 al-Nashw とその前任者を題材に、この役職の成立過程と役割を模索する。着任者の殆どが改宗したコプト教徒であることから非常に史料的制約が多い中、Little の専門である精緻な史料批判がなされているが、争点が多く結論が明確ではない。第17章はマクリーズィーの *Khiṭaṭ* を主要史料として、ファーティマ朝からマムルーク朝におけるコプト教の祭礼行事とそれに対するイスラーム政権の対応を考察する。ナイルの増水サイクルに対応したこれらの祭礼のうちあるものはイスラーム的要素に吸収され、或いはコプト教徒のみの祭礼として存続し、また消滅するに至るプロセスが示されている。年代や出典に誤記が多い(1)が、「コプト教」で祭礼の性格を一括しない姿勢には好感が持てる。また、民衆文化に対する知識人の対応に関して B. Shoshan とは異なった観点から論じており、このテーマは今後の史料考証の上で重要になると思われる。最後の第18章はオスマン朝期におけるマムルーク世帯間の婚礼を検討し、マムルークは内婚を原則とし、女性（奴隷を含む）が多額の持参金を伴って夫に与えられたとの見解を述べている。また女性には一定の財産権が認められるほか、ウラマーもそれを法的に援助していたこと、職人や農民層においては同一階層間の結婚が多いことが述べられている。人類学的見地から文書研究に取り組むことで、家族としてのマムルークや他の階層を考える上で有益な視点を提供している。他の時代でもこうした分析が可能となれば、エジプト社会を貫く構造が鮮明に理解されよう。

全体については紙数及び評者の力不足双方の理由により立ち入ったコメントは出来ないが、気づいた点を２、３指摘しておきたい。

まず、研究状況に関しては、今後は政治史に関しても文書史料などを用いた社会経済的事象との関連性の視点、あるいは文化としての政治に着目した論考が不可欠となる。そのためには、史料学的観点から文書や写本を適切に整理する作業が求められるであろう。また、マムルーク朝に関しては、バフリー／ブルジーという王朝別の性格を論じるよりも、テーマ毎に独自の時代区分を設ける意識に基いた論考（例えば本書の第２、14章）がより説得力を持っていくと思われる。

次に本書の内容に関してであるが、マムルークという共通項を用いていながら、執筆者によって分析の視点が異なっている点が興味深い。特に、個々の事例から包括的な歴史像を導き出す Haarmann と、マムルーク個人の柔

軟性、政治行動の象徴性に着目する Berkey や Hathaway では大きな開きがある。しかし、いずれの視点もマムルークを単に支配者・エリートとしてではなく、(限定的ではあるが) エジプトのイスラーム社会における参加者として捉えている点では一致しており、編者が意図した到達水準の印象については読者にもある程度伝わっていると思われる。

敢えて苦言を呈するとすれば、紙数の問題もあるにせよ、ディスカッションを何らかの形で記録に残すべきであった。シンポジウムの目的の一つが意見交換である以上、どのような事例が争点となり、各人がどのような観点から発言を行ったか、その内容が参加者に独占された印象が拭えない。

もっとも、こうした問題点はあるものの、本書がマムルーク朝・オスマン朝両時代のエジプトに関する研究の最先端を結集したものであることは間違いない。巻末に詳細な索引が設けられ、またシンポジウム後の研究にも配慮した論文があるなど、編者ならびに執筆者の読者に対する真摯な姿勢には学ぶべき点が多い。所収された論考の幾つかは、今後の研究を方向付ける指標となると思われる。

(Thomas Philipp and Ulrich Haarmann ed. *The Mamluks in Egyptian politics and society,* 1998, Cambridge: Cambridge University Press, xiv+306p.)

註

(1) 例えば、Luftiはヒジュラ810年の雨乞いの事例を挙げている (p. 274) が、典拠とされる記述 (al-Maqrīzī, *Sulūk*, vol. III, p. 1021) はヒジュラ802年ズー・ル=カーダ月初頭の記述である。また、祭礼とナイルの水位との関連性について述べた部分の注には '*Sulūk*, vol. VI, 620' の表記がある (p. 259) が、*Sulūk* は4巻までである。該当すると思われる箇所 (*Sulūk*, vol. IV, 620) にも祭礼に関する記述は見られない。